

全校研究主題

「児童生徒一人一人が主体的に取り組む授業づくり・生活づくり」  
～各教科等を合わせた指導の充実を目指して～

## I 主題設定の理由

### ◎なぜ「主体的」に取り組む姿を目指すのか（メインテーマの理由）

学習指導要領が改訂され、新学習指導要領の実施が小学部より順次開始されている。

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善をとおして、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、…児童又は生徒に生きる力を育むことを目指す」とされ、急速な時代変化に対応するための「主体的・対話的で深い学びの実現」が重要視されている。

本校の学校教育目標は、「一人一人が光り輝き、心豊かにたくましく生きる人間を育てる」であり、自立と社会参加に向け、主体的に活動し心豊かにたくましく生きる人を育てることを目指している。

令和2年度までの校内研究でも同様のテーマを掲げて授業改善に取り組んできたが、職員を対象としたアンケートでも児童生徒の目指す姿や授業作りでの課題点として「主体的な学び」を挙げている職員が多く、引き続き取り組むこととした。児童生徒が主体的に活動し、達成感や充実感を感じる経験を積み重ねることにより、将来の自立、豊かな充実した生活へとつながることを期待したい。

### ◎「主体的」な姿を狙うために、なぜ各教科等を合わせた指導の充実を目指すのか（サブテーマの理由）

新学習指導要領では、教育課程全体や各教科などの学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、①実際の社会や生活で生きて働く「知識及び技能」②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」③学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱からなる資質・能力をバランスよく育んでいくことを目指している。そして、それらを育むために、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」という視点からの授業改善を重要視している。

知的障害がある児童生徒に対する教育を行う本校においては、実態に即して、教科別の指導を行うほか、必要に応じて各教科等を合わせて指導を行うなど、効果的な指導方法を工夫しながら計画を立て、授業を行っている。社会に出てからも学校で学んだことを生かせるよう、三つの力①②③をバランスよく育んでいくために、各教科等を合わせた指導（以下、合わせた指導とする）の授業・生活指導改善は、児童生徒が何をどのように学ぶかを見つめ直すきっかけとなり、「児童生徒一人一人が主体的に授業に取り組む授業づくり・生活づくり」を目指すための一つの有効な手段となるのではないかと仮定し、サブテーマを設定した。

新学習指導要領解説では、「各教科等を合わせて指導を行う場合においても、各教科等の目標を達成していくことになり、育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てることが重要となる」との一文が加えられた。本研究でも、合わせた指導において各教科等との関連を改めて意識しながら授業づくり・生活づくりに取り組み、指導内容の一層の充実を図っていきたい。また、寄宿舎の研究においても、中学部・高等部の対象生徒について各学部と指導計画・単元目標等を情報共有し、授業で学んだことを生活の中で生かせるよう、連携を図りながら研究を進めていきたい。

## II 研究の目的

各教科等を合わせた指導において、各教科等の視点を踏まえた目標を設定し指導・支援に取り組むことを通して、児童生徒一人一人がより主体的に活動でき、生きる力を育むことのできる授業づくり・生活づくりを目指す。

### Ⅲ 研究期間

2年（R3～4年）

### Ⅳ 研究の内容

- 1 児童生徒の主体性が発揮される授業づくり・生活づくりを目指し、新学習指導要領にある各教科等の「目標・内容の一覧」を踏まえて合わせた指導の目標をたて、内容を検討する。
- 2 実践を通して、昨年度までの研究成果も踏まえてPDCAサイクルによる授業改善・支援の充実を図る。

### Ⅴ 研究の方法

<1年次>

- 1 生活単元学習や作業学習などの合わせた指導の中から、年間で取り組むものを学部ごとに決める。（5～6月）
- 2 関連する教科の視点を踏まえた単元ごとの指導計画、個別目標等を設定し、授業実践に取り組む。
- 3 昨年度研究において作成・使用した授業改善シート等を活用しながら評価・授業改善を行い、必要に応じてシートの改善等を図りながら、より実践を継続しやすいものにしていく。
- 4 寄宿舎においては、学校で設定した寄宿舎生の個別の指導計画を踏まえて、学校・寄宿舎それぞれにおいての課題、取り組みたい内容等について担当者間で情報交換し、共通して取り組むべき目標を確認して指導・支援実践に取り組む。
- 5 単元ごと、学期ごと、年度末に児童生徒の成長を振り返り、次年度の指導計画に生かせるようにする。

<2年次>

- 1 1年次研究の反省をもとに、各学部・寄宿舎ごとに計画をたて、継続して実践を行う。
- 2 PDCAサイクルを円滑に、効率的にまわすための工夫を行う。
- 3 研究のまとめ（ホームページによる研究公開）

### Ⅵ 推進計画

	1年次	2年次
4月	第1回全校研究会 全体の研究計画提案	第1回全校研究会 2年次の推進計画の提案及び学部研究について
5月	学部研究会	学部ごとに推進、実践
6月	学部ごとに推進、実践	↓ (高教研講演会)
7月	↓ (高教研講演会)	
8月		
9月		
10月		
11月	開かれた授業研究会	開かれた授業研究会
12月	(9～11月)	研究のまとめ(2年次) ↓ 研究のまとめ(2年間)
1月	1年次のまとめと次年度の方向性	次年度の研究について
2月	第2回全校研究会(1年次のまとめ)	第2回全校研究会(研究のまとめ)
3月		

## Ⅶ 各学部、寄宿舎の実践

### 1 小学部

#### (1) 令和3年度の研究

小学部では、平成30年度～令和2年度の校内研究(※1)で検討してきた、合わせた指導における各教科等の捉え方やPDCAサイクルを踏まえ、生活単元学習に焦点を当てて取り組むこととした。育成を目指す資質・能力を明確にして計画を立て授業実践することによって、児童が将来の生活に生かし、自立につなげる力として生活単元学習の目標が達成されることや、生活単元学習の中で各教科等の目標も達成できることを目指した。

(※1：同テーマによる。学部テーマは『「やってみよう」「おもしろい」「できた」を目指して～「合わせた指導」について教科の観点から～』であった。)

#### ア 実践の方法・内容

資質・能力の三つの柱(知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等)をバランスよく育んでいけるよう、単元のねらいを3観点で書き分けるとともに、どの教科等を合わせた内容であるかを記載した。(昨年度からの継続)

個別目標については、従来の様式を見直した「個別目標シート」(図1参照)を作成した。目標と、それを達成するための手立てについて、単元のねらいにリンクした形式で、教科別の指導との関連を意識しながら簡潔に記載し、できるだけ負担なく個別目標を設定できるよう試みた。また、それらを事前に授業者間で共有して授業を行った。

The image shows a comparison between an old goal sheet (left) and a new one (right). The old sheet is a simple table with columns for '目標・評価' (Goals/Evaluation) and 'エピソード' (Episodes). The new sheet is more detailed, with columns for '知識・技能' (Knowledge/Skills), '思考・判断・表現' (Thinking/Judging/Expression), and '主体的に学習に取り組む態度' (Attitude towards learning independently). Callouts explain the changes: '略案シートに記入欄があった。' (There was an entry field in the summary sheet), '個別の目標を三観点到に分けて記入していた' (Individual goals were entered separately by three perspectives), '単元毎に一人一人の作文が大変。1～3段階で目標を設定し、個々の実態に応じて選択する方法も試したが、段階毎の目標設定が難しかった。' (It was a big task to write essays for each student per unit. We tried setting goals in 1-3 stages and selecting methods based on individual circumstances, but setting goals for each stage was difficult), '略案シート・振り返り&評価シートとは別に作成。単元のねらいをシート上部に転記→一人一人の個別目標を選択して記号を記入。必要に応じて補足する。' (Created separately from the summary sheet and reflection/evaluation sheet. Transcribe the unit's purpose to the top of the sheet → select individual goals for each student and enter symbols. Supplement as needed), and '目標達成を目指すための、支援の手立てを記載。' (Record support measures for achieving goals).

図1 従来のシート(左)と新シート比較

#### イ 成果と課題

##### <成果>

- ・指導案(略案)と個別目標シート(低学団：個別評価の観点シート)を活用し、単元ごとに『育成を目指す資質・能力(ねらい)を明確にして指導計画を立てる』ことを意識しながら計画を立てる

てた。個々への支援の手立てについて、授業前に改めて一人一人の行動や想定される課題をもとに記載することから、単元のねらいや指導内容がより個々の実態に応じた形で共有され、効果的な支援を行うことにもつながった。

- ・実際の生活上の目標や課題に沿って計画し、取り組むものであるという共通理解をもち、教科別の指導との関連について意識しながらも、生活単元学習としての単元のねらいを見失うことなく取り組むことができた。
- ・授業中の声掛けの中で、普段、児童が国語や算数、図工など教科別の指導で学習している言葉や概念に触れ、一緒に具体物を見たり触ったりして、ものの名前、色、形、触り心地などを実感するという経験を積み重ねながら学習に取り組むことにもつながった。

<課題>

- ・生活単元学習を通して児童の関心が高まった取り組みについて、図工など一部の教科とは事後に関連付けて指導を行っていた部分があった（例：学習内容を振り返り、絵画や立体作品を作る）が、例えば個別指導が主となる国語や算数の時間などで、事後に再度取り上げ、関心をより高めたり、教科別の指導の新たな目標に設定して取り組み始めるきっかけにしたりすることにはなかなかつながらなかった。
- ・体育、音楽、遊びの指導についても振り返りシートを回覧してエピソード記録等を記入していたが、細切れの単元が続く時や、行事の都合等で教師の業務が増える多忙な時期は、シートに日々記入しそれを活用して評価することが難しかった。
- ・低学団と高学団で「ねらい」「評価の観点」についての捉え（※2）を一本化するに至らず、各様式を学部で統一することができなかった。（図2参照）

授業名	生活単元学習「高学団宿泊学習～レッツゴーはなまき	生活単元学習「クリーン作戦をしよう」	9月2日(木)、9月10月7日(木)1C
ねらい	〔知識・技能〕	ねらい：学校の周辺をきれいにするために、みんなで協力してクリーン作戦	
ら	① 見学先や宿泊先の名前について話したり書いたり、写	評	〔知識・技能〕
い	② 切符を買ったり、屋敷代を支払ったりすることができ	価	ア ごみ拾いで使用する道具の名前が分かったり、使い方を理解し換
	〔思考・判断・表現〕	の	
	③ きまりやマナーを守って活動することができる。(生活	観	イ 集団での歩行移動を意識しながら、クリーン作戦の活動に参加す
	④ 楽しい活動や、思い出に残ったことを伝えたり、発	点	〔思考・判断・表現〕
	〔主体的に学習に取り組む態度〕	ウ ごみの種類の違いに気付いたり、だまかに分別したりすることか	〔主体的に学習に取り組む態度〕

図2 高学団（左）と低学団のねらいの立て方比較

(※2：低学団は、日頃感じていたねらいの立てにくさを解消するため、高教研講演会での講演内容を受け年度途中より様式を変えて試行。大きなねらい1～2つを設定し、「児童のどのような姿が見られれば、ねらいを達成できたことになるか」を観点別で示した。)

(2) 令和4年度の研究

ア 実践の方法・内容

<単元、ねらい、指導内容の見直しと授業実践>

生活単元学習の単元や指導内容を整理し、ねらいを明確にして授業を行った。

- ・年間指導計画(図3参照)について、令和3年度までは、単元目標や具体的な内容等を盛り込み、3～4ページにわたって作成していた。令和4年度の計画を立てるにあたっては、単元毎の関連性や一年の流れを誰が見ても把握しやすいよう(年間計画は学級毎に立てるが、授業は学団で行うことが多い)、記載事項を厳選して1ページにまとめた。

- ・ 単元間・学団間・各教科等などとのつながりから単元を整理し、計画を立てる際に下記のような改善を試みた。
  - ① ねらいを見直し、必要であれば年間を通して取り組む大単元を設定することとした。
  - ② 単元により、低学団と高学団の関連を意識して実施期間や内容を検討した。
  - ③ 単元に含まれる各教科等を年間指導計画に明示(暫定。略案作成する際に検討して確定する。)した。特に、生活科の内容については、生活単元学習の中でもれなく取り組めるよう意識して計画を立てた。
- ・ P D C A サイクルを回しながら授業実践に取り組み、特に単元設定や取り組み方の改善を試みた点については研究日を活用して振り返りを行った。

小学部 1年 生活単元学習 年間指導計画

個別の指導計画参照		小学部 1年 生活単元学習 年間指導計画	
月	題材・単元	単元の目標	学習内容
4	新しい学校・友達を知ろう	・校内の施設の確認をとおして、学校生活について知ることができる。 ・学級の友達を知り、一緒に楽しく活動することができる。	・校舎探検
5	学級作りをしよう	・低学団集会で、友達や先生の名前を知る。 ・友達の前で自己紹介カードを発表することができる。	・自己紹介カード ・自己紹介
6	道路の歩き方を知ろう	・友達と協力して学級目標を作ることができる。	・制作活動 ・道路の歩き方 ・横断歩道の渡り

通年で計画的に取り組みたい単元を設定した。

「～をしよう1」など番号が振ってあるものは大単元。年間で達成したいねらいを設定し、2、3…と様々な学習を通して取り組んだ。

含まれる各教科等を暫定で記入。高学団ではすでに年間指導計画に盛り込んでおり、低学団も同様にすることとした。

「◆」マークは低・高学団の関連を意識したい単元。

図3 従来の年間指導計画様式(左)と新様式比較

<略案等様式、P D C A サイクルの見直し>

P D C A サイクルを見直し、授業実践の中で無理なく効果的に進められる方法を探るとともに、学部での統一した様式案について検討した。

- ・ ねらいの立て方が異なる二つの略案様式(前ページ図2)をどちらも活用してみて、両者の長所、短所を話し合った。
- ・ 振り返りシートについては、合わせた指導での活用に重点を置き、教科別の指導では、シートの回覧回数を月1～2回等とする(評価に支障のない程度に間隔をあける)など工夫して、生活単元学習に限らず授業全般において効果的かつ負担の少ないP D C A サイクルを模索した。
- ・ 来年度以降に活用する個別評価のためのシート素案(学部で統一)を作った。

イ 成果と課題

<成果>

- ・ 年間指導計画を改善したことから、年度途中によく見返すようになった職員が多かった。年間で数回に分けて取り組む大単元や、通年で取り組む単元についても、見返した時に関連性や一

年の流れを把握しやすく、見通しをもって授業計画を立てることにつながった。また、含まれる各教科等を明示し、授業内容や支援の手立てに意識的に盛り込んだことにより、児童が教科別の指導で身に付けた力を発揮することにつながった。

- ・略案等P D C Aサイクルを回すための様式を授業実践の中で活用しながら見直し、様々な意見を出し合って統一した様式案を作成することができた。来年度より活用し、よりよいものにしていきたい。また、略案様式統一の際、ねらいの立て方についても検討した結果、単元の大きなねらいを設定→評価規準と観点を設定する、という方法で取り組むことになり、「評価規準」「評価の観点」などの文言についても再度見直して修正することができた。
- ・単元評価のシートが年間を通してなかなか活用されていないことが分かり、個別のP D C Aを1シートで完結できるよう、来年度に向けて改善することができた。

<授業実践の中で見えた具体的な成果の例>

#### 【低学団】

- ・「みんなと仲良くなろう2『遠足に行こう』」（開かれた授業研究会を実施）

学級の枠を超えた小グループでも、みんなと一緒に行動しようとする、友達の手本を見て同じようにやってみる、友達に手本を見せてあげようと頑張るなどの姿が見られ、その後の年間を通じた学団での学習につながった。後に続く「仲良く…」単元においても、友達との関わり方に成長が見られた。

#### 【高学団】

- ・「クリーン作戦をしよう」

昨年度も清掃活動や落ち葉拾いなどに取り組んでいたが、それぞれの活動日数は1～数日程度だった。今年度は季節ごとにクリーン作戦週間を設けて一週間毎日取り組む期間を作った。その結果、自分たちの教室や校外をきれいにする理由などに児童が気付くことができたり、継続した取り組みの中で、できることが増えたりするなどの成果が見られた。様々な経験を積むことにつながり、活動の幅が広がった。

- ・「校外学習に行こう1・2」

昨年度までは、年間に遠足を1回、校外学習を1回実施していたが、B R Tの利用など重点的に取り組みたいことを精査する中で、校外学習を2回実施する計画へと改善した。1回目での経験を生かして2回目を実施することにより、児童が生活の中で生かせる力を育むことにつながった。

<個別の指導計画における教科や自立活動の目標を生活単元学習でも達成した例>

- ・国語の目標「平仮名のなぞり書き」を遠足の単元の中の公園の遊具作りで達成。  
(船作りで、わんぱくまる、の字をなぞって書き、遊具を完成することができた。)
- ・自立活動の目標「指先を使って物をつまむ動作」を遠足の単元の中の公園の遊具作りで達成。  
(アスレチック作りで、枠の穴にひもを通す、枠に両面テープを貼る、などの活動に意欲的に取り組み、遊具を作ることができた。)
- ・算数の目標「順番の理解」を校外学習の単元の取り組みの中で達成。  
(示された順番に操作する、順番にB R Tに乗り込む、などして公共交通機関の切符を自分で購入し、安全に乗車することができた。)

<課題>

- ・合わせた指導を行った後に教科別の指導等においても同様の内容を取り上げ、関心をより高めた

り、各教科等の新たな目標に設定して取り組み始めるきっかけにしたりすることについて、学部研究で重点を置き取り組むところまでは至らなかった。来年度以降、相互の関連付けを意識した授業実践を行っていききたい。

### (3) まとめ

単元のねらいをよく検討し、個別のねらいや支援の手立てについて共通理解を図りながら授業実践することによって、生活単元学習の目標を、児童の生活に生きる力として達成することができた。また、教科別の指導における個別目標を一部達成することにつながった。今後さらに、合わせた指導と、教科別の指導との相互の関連付けを意識しながら実践を継続していききたい。



## 2 中学部

### (1) 令和3年度の研究

#### ア 実践の方法・内容

全校研究主題を受けて、中学部では研究実践の主な場を作業学習とし、その充実を目指した。

毎月の研究日に表1のように、合わせた指導における個々の生徒の各教科の主な目標と支援を共有した。作業学習を中心に持ち上げ（9月のみ生活単元学習）、1つまたは2つの教科について検討した。目標については、できるだけ一つの内容を三つの観点（知識及び技能、思考・判断・表現力、学びに向かう力・人間性等）で書き分けるようにし、その達成を目指すために、「主体的、対話的で深い学び」として支援の手立てを記載した。

開かれた授業研究会は、工芸班の作業学習（単元名「力を合わせてミニレターセットを作ろう」）で行った。指導案には、作業学習の目標に加えて、主に研究日に検討した国語、数学の各生徒の目標も記載し、教科の視点からも授業づくり、授業改善を行った。また、指導・支援について、主体的、対話的で深い学びの視点から整理して記載した。同日に行われた授業研究会では、参観者から生徒の力が発揮されていた場面を付箋に記入してもらい、それを3観点に沿って整理するグループワークを行った。

表1 作業学習における数学の目標の例

生徒名 (記入者)	何ができるようになるのか 数学は「数量の基礎」「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」の中から1つ		
	生きて働く 知識及び技能	未知の状況も対応できる 思考力、判断力、表現力等	学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力、人間性等
生徒1 (職員1) 前期目標	2つの数量を比較することができる。	数量の大きさを表す用語に注目して表現することができる。	数を数えたり比較したりすることに関心を持ち、数を意識して作業することができる。
	どのように学ぶか主体的、対話的で深い学び（三つの力をバランスよく育てるための手立て）		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数を意識できるようにできた部品を置いたり入れたりする所に数字をふる。また、目標数を意識できるように印などをつける。</li> <li>・多い少ないなどを表すジェスチャーを添えて、成果を確認する。</li> </ul>		
前期評価	教師からの評価をもとに、目標数と実際の作業量を比較することができた。	教師が示す手本に応じて「たくさん」「少し」などの数量の大きさを表す用語に注目してジェスチャーで表現することができる。	目標数を意識して作業することができた。
後期目標	3段階程度の数量（多い、普通、少ない）を比較することができる。	数量に関する質問に対して自分で数量をジェスチャーで表現することができる。	・数量と評価の違いに気づいて、意欲的に作業をすることができる。

#### イ 成果と課題

##### <成果>

##### ・各教科の視点を踏まえた合わせた指導の授業づくり、授業改善

これまでの作業学習の授業づくりや授業改善では、生徒が主体的に効率よく作業できるようにすることに注目しがちであったが、教科の目標を明文化することによって各教科等の指導の機会になることを改めて意識して授業を行うことができた。例えば、木工班では、木材の切断作業のための印付けの際に、必要な数値がすべて書かれている紙を提示したり、メジャーの目盛に色を付けたりする支援をしていたが、数学の倍数や測定についての目標をかかげたことから、倍数を電卓や暗算で求めながら印を付けるなど、数学に関する知識及び技能を身に付けたり活かしたりする場面となった。日誌の様式、手順表で使う言葉、報告の仕方、作業量の確認や評価の仕方など、様々な授業改善を国語や数学などの生徒の実態を踏まえて行うことができ



た。

#### ・3観点での目標設定や評価

知識及び技能に加えて、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力、人間性という観点からの目標の達成にも迫ることができた。先に挙げた木材の切断の場面を例にすると、作る製品によって切断する長さを判断したり、よりよい製品を作るために正確に測定しようとしたりするなどである。これは、合わせた指導で実際的な経験を大切にしている良さであると思われる。また、評価においては、生徒の個人内差に気付くこともできた。例えば、知識及び技能は身に付いているが、その力を自分から積極的に活用したり、その力を使う良さや喜びを感じたりという点（学びに向かう力、人間性）についてはさらなる支援が必要だと思われる生徒もいた。

<課題>

#### ・3観点での目標設定の難しさ

3観点で目標を書き分ける難しさがあった。学習指導要領に挙げられている各教科の「目標・内容の一覧」を参考にしつつ、3観点の中心的な意味を押さえ、生徒の実態に応じて柔軟に3観点で指導目標や評価を記載していく必要がある。

#### ・教科別の指導との関連

より効果的に目標を達成できるよう、教科別の指導の目標との関連をさらに意識して合わせた指導の授業づくり、授業改善をしていく必要がある。

#### ・今回取り上げなかった合わせた指導や教科への対応

今年度、主に取り上げたのは合わせた指導は作業学習、教科は「職業・家庭」「国語」「数学」であった。それ以外の合わせた指導や教科についても今年度取り組んだような授業づくりや授業改善を行っていく必要がある。

## (2) 令和4年度の研究

### ア 実践の方法・内容

全校研究主題を受けて、中学部では昨年度に引き続き研究実践の主な場を作業学習とし、その充実を目指した。

評価規準シート（表2参照）を用いて作業学習における個々の生徒の各教科の主な評価規準と支援を共有した。評価規準については、できるだけ一つの内容を三つの観点（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）で書き分けるようにし、その達成を目指すために、「主体的、対話的で深い学び」として支援の手立てを記載した。令和3年度は、表1のように目標と支援を共有していたが、令和4年度は目標ではなく評価規準と支援を共有するようになったのは、「特別支援学校小学部・中学部 学習評価参考資料」を参考にするためである。

開かれた授業研究会は、木工班の作業学習（単元名「新製品を作ってプレゼントしよう」）で行った。評価規準シートを用いて検討した職業・家庭、国語、数学の各生徒の目標にアプローチできるように新製品を開発し、教科の視点からも授業づくり、授業改善を行った。また、指導・支援について、主体的、対話的で深い学びの視点から整理して記載した。

表2 評価規準シートの例

評価規準シート（作業学習における教科の目標） 生徒氏名：B

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
職業・家庭	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業に必要な知識や技能を理解することができる。2段階イ（ア）㉞</li> <li>※作業内容や手順、作業で使う材料や道具を理解し、自ら準備し、作業をすることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業上の安全や衛生及び作業の効率について考えて工夫している。2段階イ（イ）㉟</li> <li>※次の工程のことを考えて作業することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>意欲や見通しを持って取り組み、自分の役割に気付くことができる。</li> <li>※やるべきことを理解し積極的に作業に取り組むことができるようになる。</li> </ul>
<p>手立て（主体的・対話的で深い学びの観点から）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>手本を示し、適宜手順表を作成する。</li> <li>作業や職業について話す場を設定する。</li> </ul>			
国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>理解したり表現したりするために必要な語句の量を増やし、使える範囲を広げている。2段階ア（ウ）</li> <li>※「〇〇を頑張りました」だけではなくより具体的に言葉にすることができるようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「書くこと」において、見聞きしたことや経験したことの中から、伝えたい事柄を選び、書く内容を大まかにまとめている。（ア）</li> <li>※作業をうまく行うためのポイントを作業日誌やメモ帳に書けるようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉（文字や文）を通じて積極的に自分を振り返り表現したり、過去に書いた文も参考にしながら、言葉を使おうとしている。</li> <li>※作業日誌やメモ帳に書いた文を自分から参照しようとしている。</li> </ul>
<p>手立て（主体的・対話的で深い学びの観点から）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日誌の他にメモ帳を用意する。</li> <li>始めの会や作業中に、作業のポイントや評価を簡潔に伝える。</li> <li>反省会では、日誌に書いた文をもとに発表するよう促す。</li> </ul>			

## イ 成果と課題

＜令和3年度と同様の成果＞

### ・各教科の視点を踏まえた合わせた指導の授業づくり、授業改善

令和3年度と同様、教科の目標を明文化することで各教科等の指導の機会であることを改めて意識して授業を行うことができた。例えば、工芸班では、紙漉きの材料になるちぎった牛乳パックを量る、油吸い取りパッドの材料となる牛乳パックの綿を量るなど、「量を量る」作業を複数取り入れることで量の概念が身に付いてきた生徒や、紙ちぎりの作業で10枚の紙を洗濯ばさみでまとめ、1つの束が終わるごとに数字カードと洗濯ばさみをマッチングしていったことで数の概念の理解が徐々に高まってきた生徒など、作業の流れの中で算数・数学の目標・内容を狙うことができた。また、木工班の木材への印付けの作業では、生徒によって長さの単位を使用すること、測定具を正しく使用すること、直線を理解することなど、数学の目標・内容の中から重点的に狙うところを確認して指導にあたることができた。

### ・3観点での目標設定や評価

令和3年度と同様、3観点からの目標の達成に迫ることができた。例えば、木工班では作業のポイントをメモするメモ帳を用意することから国語の「書く」の目標の達成に迫った。生徒が作業のポイントを正しい文で書くだけでなく（知識・技能）、メモしたポイントから次時の目標を決め（思考・判断・表現）、自分からそのメモを参照すること（主体的に学習に取り組む態度）を促すことができた。また、工芸班では、3観点の評価が目標をより具体的にしていくことに役立った。例えば、「良い紙を作る」という目標のために、「水切りを水が落ちきるまでやる（思考・判断・表現等）」「枠を傾けずに紙を漉く（知識・技能）」「最後まで、丁寧に作業する（主体的に学習に取り組む態度）」など目標をより具体的にすることによって、教員のみならず生徒も良い紙を作るためにはどうすればよいか、自分で考え作業することができるよう

になってきた。

#### <令和3年度の課題に対する成果>

##### ・3観点での目標設定の難しさ

今年度は表2のように、学習指導要領に基づく表現は中黒で、作業場面での具体的な評価基準は※で書き分けることによって、職業・家庭、国語、数学の目標・内容を作業学習に落とし込むことができた。今後も各教科等の目標を作業学習などの合わせた指導の具体的な場面に合わせて記述を重ねていくことからより3観点での目標設定がしやすくなると思われる。

##### ・教科別の指導との関連

個別の指導計画を立てる時期に評価規準シートを記入した。また、生徒によっては、個別の指導計画の国語、数学の評価に作業学習などの合わせた指導での様子も記載した。教科との関連を深めるだけでなく、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度の観点を盛り込みやすくなった。

#### <継続して残った課題>

##### ・今回取り上げなかった合わせた指導や教科への対応

昨年度同様、今年度も主に取り上げたのは、合わせた指導は作業学習、教科は「職業・家庭」「国語」「数学」であった。作業学習を取り上げたのは、年間を通して授業があること、学級の枠を越えて教員が担当する授業なので学部で研究に取り組みやすいこと、「職業・家庭」「国語」「数学」は作業学習と関連が大きいことなどの理由があった。「理科」「社会科」等、今回取り上げなかった教科については、改めて作業学習で扱える目標・内容はないかを検討するとともに、より自然にそれらの教科を扱うことができる他の合わせた指導（生活単元学習など）やその単元はどのようなものかを検討していく必要がある。

### (3) まとめ

中学部では、作業学習において「職業・家庭」「国語」「数学」の各教科の視点を踏まえて目標を設定し指導・支援を行うことを通して、生徒一人一人がより主体的に活動できるような授業改善を行うことができた。

継続して残った課題については、カリキュラムマネジメントを通して改善していく必要がある。

### 3 高等部

＜研究テーマ＞ 自ら考え、身に付けた力を発揮できる授業づくり  
～各教科等とのつながりや視点を取り入れた作業学習～

#### (1) テーマ設定の理由

高等部では、合わせた指導の「作業学習」に焦点をあて、生徒一人一人が主体的に取り組む授業の構築に向けた研究をすることにした。作業学習で望まれる生徒の主体的な姿について検討したところ、自分で考える・判断する・気付くなど「思考力・判断力・表現力」に関するものや、学んだことを生かす、意欲をもって最後まで取り組むなど「学びに向かう力、人間性」に関する内容が多く挙げられた。以上のことより、「自ら考え、身に付けた力を発揮できる授業づくり」を高等部の研究テーマに設定した。

#### (2) 令和3年度の研究

##### ア 実践の方法・内容

新学習指導要領の実施に伴い、今まで効果的な指導の形態として取り組んできた合わせた指導について、改めて各教科等との関連を見直す必要があると考えた。作業学習で取り組んでいる内容にはどのような教科の要素が含まれているか、また生徒が今までに教科別の指導においてどのような力を身に付け、それを作業学習の中でどのように生かすかなどを検討し、各教科等とのつながりや視点を取り入れた指導の充実を図ることにした。

##### 【担任との情報交換と授業改善】

生徒の教科別の指導における達成状況を確認し、それを作業学習の内容や目標につなげるため、作業班ごとに対象の生徒1名について担任と情報交換を行った。情報交換に基づいて作業学習の目標を設定し、授業改善シートを作成した<図1>。作業内容や支援方法を見直し、実践(PDCA)を繰り返した。さらに、学部研究会で対象生徒の様子を全体で共有し、支援の方法について検討した。授業改善シートの様式は、前回の研究で活用したシートに担任との情報交換で得た内容(各教科の達成状況や課題)を入力する欄を新たに加えた。

高等部授業改善シート(調理班)

生徒名	3年 8組 C		
個別の目標	積極的に仕事に取り組み、いろんなレシピを覚えることができる。→(後期)次にやることを考えながら、積極的に仕事をする。販売時に、大きな声でお客様に対応することができる。→(後期)自分から挨拶や会話をすることができる。		
各教科の実態(できること、取り組んでいること、課題など) ※担任からの情報			
国語	補聴器を使用することで耳の聞こえが良くなった。語彙が増えた。漢検5級。感想などを構成するのは難しい。	数学	簡単な足し算ができる。電卓を使う。金額は分かっていると思われる。
産社	あすなろホームを目指す。(販売や喫茶の仕事などがある。)	自立活動	集団の中で自分の意見を話すことが目標。
道徳	自分から挨拶は課題。作業教室への出入りでは挨拶できる。自信があることは言える。	その他	行動に移すまでや、理解するのに時間がかかる。寄宿舍で、後輩に話しかけるようになった。
※日支援の仕方が良かった △支援の仕方が悪かった ◇支援の方法の改善案			
日付(期間)	作業内容	支援の仕方 (仮のよに学ぶ、支援の手立て)	評価(作業の様子)
8月26日	お総菜販売	販売2日前に「職員室に入室退室するときの挨拶」「注文を受けた先生に商品を届けるときに挨拶」について書く用紙を渡し、考えてるように伝える。 販売前日に、考えた挨拶を元に、話す内容を教師と一緒に確認し、練習する。	◎ 前日に考えた挨拶を、自発的に小さいメモ帳にまとめてきた。 ◎ 職員室に入室するときは、メモを見ずに挨拶することができた。昨日と。時々、思い出そうとして無音になる時間があるが、練習してきたことができた。 △ 商品を届けた副校長とのやりとりで、イレギュラーなこと(「おつりありに、何も反応できずシーンとした時間が続いたことがあった。分からない待ちください。」と話してシーンとなる時間を減らすことを次の目標に
8月31日	ケーキ販売(寄宿舍)	お総菜の時と同様に、事前に職員室への入室退室の挨拶を練習。入室の挨拶には、今日のおススメを加えることにした。 今回は、購入に来てくださった方に「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」をしっかり伝えることを目標にすることを確認。	△◇ ひとり2人で寄宿舍への販売を担当。 寄宿舍に着いたときに、メモ帳を忘れてきたことに気付く。入室の挨拶です。ケーキの販売にきました。までは話せたが、その後は言葉がまったく後ろでさやき、その言葉を話した。→持ち物の確認不足。 △◇ 販売の途中、籠に入っているスプーンを取って確認し伝えたが反応なし。意味が分からないのかともう一度伝えたと動けず。その後泣き出す。涙を拭くと、教師の勢いにびびりたこと。その後は自分から挨拶できる状態ではなかったため、教師と一緒に声を出すようにして販売活動を行った。→レベルの上げは、なかなか行動に移すことができない。言葉掛けの仕方にも注意

<図1> 調理班の授業改善シート

##### 【「教科・領域関連表」の作成】

作業内容がどの教科・領域等と関連しているかを明確にするため、作業班ごとに「教科・領域関連表」を作成した。<図2>学習指導要領「各教科の目標・内容の一覧」を参考に、作業学

習の内容と関連がある部分を探し入力した。シート上で各教科の内容をクリックすると番号で表示されるが、番号だけだと内容が分かりづらいため、教科の領域名称及び育成すべき資質・能力の三つの柱を入力する欄を設けた。

**つまみ細工**

- ・準備、片付け
- ・製作(布選び、花型の器具を使って縫う)
- ・報告

**作業内容**

**学習指導要領の各教科の内容を選択すると番号が表示される。**

社会	51					生活との関連、選択・判断する力【思判表】
数学	272	32				数の処理、図形的位置関係【思判表】
理科						
音楽						
美術	52					構成の創意工夫(表現)【思判表】
保体						
職業	45	47	55	57		勤労の意義、作業の確実性・持続性・巧緻性【知技】
家庭	83	85				布を用いた製作(縫い方、用具の取扱い)【知技】
外国						
情報						
道徳	62	65	69	74	76	自主、自律、礼儀、勤労、集団生活
特活	60	61	66			集団活動【知技】【思判表】
自活	9	10	12	17	22	人間関係形成、環境の把握、身体の動き

**刺し子**

- ・材料、道具の準備と付け
- ・一定時間集中
- ・丁寧な作業
- ・報告・相談

数学						
理科						
音楽						
美術	46	54				表現の創意工夫【思判表】
保体						
職業	39	43	45	47	57	勤労の意義、職業生活【知技】【学】
家庭	83	85				布を用いた製作【知技】【思判表】
外国						
情報						
道徳	62	64	65	74		自主、自立、勤労
特活	61	62	64	65	67	
自活	6	9	10	25	27	心理的な安定、人間関係の形成

・各教科の領域名称や内容  
 ・育成すべき資質・能力の三つの柱  
 知識及び技能→【知技】  
 思考力・判断力・表現力→【思判表】  
 学びに向かう力。人間性→【学】

【開かれた授業研究会】作業学習「木工班」

「適材適所の品質向上計画」という単元名で、11月の光陵祭販売活動に向けた木工製品作りに取り組んだ。作業内容については、普段の学習で身に付けた教科の力を把握した上で、生徒が力を発揮できる活動、今頑張っていることにつながる活動、最も得意とし見通しがもてる活動などを取り入れることを意識した。

研究会では、生徒の主体的な姿、配慮や支援、教科とのつながりについてグループごとに協議した。支援のバランスについて、作業内容や分業についてのアイデアなど、様々な意見が出された。

イ 成果と課題

<成果>

- ・担任と作業担当との情報交換は、教科別の指導における生徒の実態を把握する機会となり、それに基づき作業学習の目標を設定することができた。
- ・授業改善シートを活用することによって、生徒の達成度や課題を把握することができ、作業内容や支援方法について職員間で話し合いながら改善を図ることができた。
- ・学部研究会の時間に対象生徒について全体で話し合ったことは、複数の視点で様々な角度から生徒を見ることができ、新たな支援方法を見出すことにつながった。また作業学習の様子を受け、教科別の指導へフィードバックする部分があることに気付くことができた。
- ・「教科・領域関連表」を作成することによって、作業学習と教科別の指導とのつながりを確認できた。
- ・「教科・領域関連表」を作成するためには、学習指導要領の各教科等の内容すべてに目を通す必要があるため、この研究が学習指導要領を読むきっかけとなったという職員が多かった。

<課題>

- ・担任と作業担当との情報交換を、いつどのように設定するのかの検討が必要である。
- ・授業改善シートの様式は、次年度へ引き継ぎのためのまとめの欄が欲しいという意見もあり、活用しやすいように改善を図る必要がある。



- ・対象とする生徒の数を次年度は増やした方がよいという意見と、負担感を考えると次年度も対象は1人の方が良いという意見があるため、検討が必要である。
- ・「教科・領域関連表」を作業班内で分担して作成したが、教科の捉え方に個人差が出る。
- ・作業内容や方法は毎年同じではないため、年度毎に関連表を見直す必要がある。

### (3) 令和4年度の研究

#### ア 実践の方法・内容

##### 【授業改善シートの活用】

引き続き、授業改善シートの活用に取り組んだ。〈図3〉昨年度の反省を受けて記入する項目を減らし、対象生徒を作業班全員に広げた。これにより一人一人の作業の様子や必要な支援、生徒の変容について記録できるようにした。様式は使いやすい形を探るため学部研究会で話し合い、班ごとに様式を変更して使用してもよいこととした。

日付	支援内容・改善点など
8/22(月) 23(火)	<p>Try 練習のため 10:20 スタート</p> <p>ミシンでターゲルセンター作り。慎重にすすめ 精神的に疲れた 曲がるともれ 完成の具合いよ 「ビニョーどす」と答えることがあ、たのぞ 「どうビニョー たのぞか説明させる。</p> <p>：タテのあいせあり 刺し中はおちこい。朝会 終礼で「大あこい」 しはし へいへいしている 「心の中」しせのぞ」と自分い言いかせていた。</p> <p>：マイン-ズたが 順調 水か 木に完成する という見通しをもち、 何の製品にするのかは そこから。</p> <p>：丸いつまま、けんま、糸を張るの <sup>か</sup> 充分でたいため たまに からまる。順番は増えていた。</p>

〈図3 手芸班の授業改善シート〉

##### 【3観点による学習評価】

作業学習における社会・理科・職業・家庭の評価について、作業班ごとに考えた。評価の際は生徒の力を3観点で捉えることを意識できるように、3観点（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度）を色分けして記入するようにした〈図4〉。（※白黒印刷につき、ここでは、知識・技能を下線、思考・判断・表現を下二重線、主体的に学習に取り組む態度を波線で示す）

## 調理班【職業】

名前	作業の様子、評価
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>朝礼時に立てた目標について理解し、<u>自分にできることを考え、終礼で反省を述べる</u>ことができた。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゴムベラやスプーンなど調理道具の特性を理解し、<u>作業工程や用途に合わせ、自分で使い分け</u>ることができた。</li> </ul>

< 図 4 調理班の学習評価「職業」 >

### 【開かれた授業研究会】作業学習「調理班」

クリスマスの予約販売に向けた単元を設定し、製菓作業に取り組んだ。指導にあたっては各教科等の目標・内容を参考に、3観点の評価規準を明確にして授業を行った。働くために必要な力を身に付けながら、お客様の笑顔のために生徒たちが主体的に授業に取り組む様子が見られた。研究会では、生徒たちの動きに無駄がなかった、生徒たちが主体的に取り組めるよう支援が最低限であったという意見が出された。また、生徒同士で作業の進行状況を確認し合うことで、さらに教師の支援を減らせるのではないかとの助言を得た。

### イ 成果と課題

#### < 成果 >

授業改善シートについては、様式を固定せず班ごとにやり方に幅をもたせたことによって、より活用しやすくなった。また、研究会で他の班のやり方を知ることができた。

3観点による学習評価を行ったことにより、作業学習の指導の際も、教科の内容を反映した目標設定につながった。評価を全員で記入することとしたことにより、評価の仕方や評価規準について共通理解を図ることができた。さらに、教科ごとの評価を行うことで、指導要録に記入する学習内容を確認しやすくなった。

### 【主体的に身に付けた力を発揮できた姿】

#### ○手芸班

布を用いた製作を行うことにより、目的に応じた縫い方及び用具の安全な取り扱いについて理解し、家庭に関する知識を得ることができた。例えば、刺し子布の柄や糸の色や組み合わせを自分で選ぶことにすると、デザインを考えながら意欲的に取り組む生徒の姿が見られた。また、ミシンで製品を作る時には、ミシンの仕組みや下準備の重要性を理解し、完成までの見通しをもって製品作りを行うことができた。

#### ○調理班

授業改善シートから個々の課題や支援方法を確認し、各教科の内容を踏まえて生徒それぞれに合った支援を行うことができた。片付けに時間がかかる生徒は、タイマーを使用することによって時間を意識することができ、時間短縮につながった。また、班長として行って欲しいことを明確に目標に提示すると班長としての意識が高まり、自分から班員への声掛けができるようになった。

全体では、ケーキ作りや片付けが終わった後、時間があるときに行う作業を事前に提示する



ことから自分で判断して取り組めるようになり、その取り組みから自分から気付き動くことの大切さを理解し、行動に移すことが多くなってきた。

#### ○農環班

栽培する野菜に含まれる栄養や生産量が多い地域など、野菜に関する情報をテスト形式で確認することにより、社会に関する知識の定着を図った。得た知識を農作業の現場で具体的に扱うことで、生徒たちが関心をもち、より深く理解することができた。それにより教師からの情報だけでなく自ら疑問をもって調べ、野菜に関する知識を積極的に得ることができるようになった。

#### ○木工班

授業改善シートをカスタマイズし、その日の指導内容や記録を記入するだけでなく、生徒一人一人の個別の指導計画や関連教科の内容を一覧できるようにした。教科（国語や数学など）の内容や目標を踏まえて、作業工程の中にさまざまな言語活動や測定、計算、木の性質についての理解など要素を生徒の実態に合わせて取り入れている。それらの取り組みによって、例えば製品を塗装する際に刷毛の使い方や塗料の取り扱い方を指導された時に、生徒は「なぜそうするのか」を深く理解し、「どう動けばいいのか」を自ら考えるようになってきた。このように、本研究によって生徒の自立的・主体的な引き出すことができた。

#### ○陶芸班

その日の気温や湿度によって粘土の硬さが違うことを理解し、成型する際に気を付けることができるようになった（理科）。また、買う人や使う人のことを第一に考え、使いやすい持ち手や飲みやすい吸い口の形状を意識し、消費者目線に立ってそれまでの使い方とは違う用途を提案したりして、製品の精度を高めることができた（家庭）。焼き上がった製品を確認することで、自由な発想を引き出し、主体的に製品づくりに取り組む姿勢を促すことにつながった。

#### <課題>

作業学習で行っていることが、他教科とどのようにつなげることができるかを今後探っていく必要がある。また評価規準が幅広いため、どこまで評価を行うかについては教員の共通理解を図る必要がある。

#### (4) まとめ

高等部でも新学習指導要領が実施となり、新たな観点や視点が必要となったが、それに対応するべく、まずは作業学習を取り上げて、内容や評価について学部内で様々協議してきた。

まだ実施されたばかりで、3観点や教科のつながりについて今後さらに深める必要はあるが、2年間の研究に取り組む中で、どうしたらより生徒が主体的で身に付けた力を発揮できる作業学習になるかを皆で考え、生徒の成長につなげることができた。今後も各教科等を合わせた指導の在り方については、実践と検討を重ねながら指導を充実させていきたい。

## 4 寄宿舍

＜研究テーマ＞ 生徒一人一人のやる気・主体性の成長を目指して  
～将来につながる主体性の育成～

### (1) テーマ設定の理由

一年目は「学校との連携を通じた支援」を目指し、寄宿舍における生徒の主体性を伸ばすための取り組みの一つとして、学校と寄宿舍の双方で取り組めることを確認し、支援方法の改善や充実を図っていきたいと考えた。加えて、取り組みを情報共有することにより、生徒一人一人が気付き、自ら行動できる主体性の伸長を目指すことができると考えた。

二年目は、サブテーマ「将来につながる主体性の育成」に迫るため、一年次に確認した内容を踏襲しつつ、新学習指導要領のキーワードとなる「主体的・対話的で深い学び」という観点に着目しながら生活指導実践を進め、その中で PDCA サイクルを活用しながら主体的な行動を促すための効果的な指導方法を探っていきたいと考えた。

### (2) 令和3年度の研究

#### ア 実践の内容・方法

研究主題を受けて寄宿舍では、生活指導そのものを「合わせた指導」と捉え、指導・支援のさらなる充実を目指した。具体的には、学校と寄宿舍それぞれにおける課題や取り組みたい内容等について担当者間で情報交換し、共通して取り組むべき目標を確認してから指導・支援を行った。そこで生徒の実態を多面的に捉え、様々な場面で活用できる力を身に付けることをねらいとした。研究方法としては、研究係が中心となり対象生徒をピックアップし、舎室担当と学級担任または副担任とマッチングし、学校と共有して取り組める目標の設定を行った。

#### イ 成果と課題

##### ＜成果＞

- ・学校と寄宿舍の職員で話し合いの場を持ち、生徒個々の課題などを共有することができた。

##### ＜課題＞

- ・学校と寄宿舍で職員の勤務形態が異なるため、学校と寄宿舍の職員で話し合う方法や日程の調整に時間を費やした。
- ・PDCAサイクルを活用し、主体性を引き出すための取り組みまでに至らなかった。

### (3) 令和4年度の研究

#### ア 実践の内容・方法

学習指導要領で重視されている「主体的・対話的で深い学び」の視点に着目して生活指導を行った。また、日頃から寄宿舍で行っている生活指導は、自立活動に示されている6領域と重なる部分が多いことから、寄宿舍での生活指導を自立活動と捉え、踏まえた指導を進めることによって学校と連携し、指導の継続を図った。研究方法としては、棟から1名事例対象生徒を選出し、事例実践を進めながら目標や手立て等を見直し、支援の改善につなげた（事例1～3参照）。また各棟の取り組みを全体で共有し、主体的な行動を促す効果的な指導方法を探った。

## 【事例1】

対象舎生：F（ 高等部 1年 ） 泊数…4泊
長期目標： <ul style="list-style-type: none"><li>・ 基本的な生活習慣の定着を図る。</li><li>・ 生活経験の拡大を図る。</li><li>・ 心身共に健康に過ごす。</li></ul>
短期目標：日用品を購入することができる。
<p>◆指導内容（手立て）</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 職員と一緒に近隣の店に買い物に行く機会を設ける。</li><li>・ 寄宿舎で使用している洗剤等の残量を確認し、予め購入する物を決めておく。</li><li>・ 購入後はレシートと残金を確認し、小遣い帳に記入する。</li></ul> <p>◆主体性を引き出すために、棟内で工夫、確認したこと（できる環境作りや指導場面など）</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 卒業後の生活を話題にしながらか進めた。</li><li>・ 本人からの発信で行くこととし、同行者を担当職員に限定しないことにした。</li><li>・ 目的の物の購入だけでなく、本人の興味のあるコーナーを見たり、本人が希望する物を購入したりする等、買い物が楽しみとなるようにした。</li><li>・ 家庭と情報交換し、必要な物を家庭でも自分から伝えられるように促した。</li></ul> <p>◆学校との連携</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 学級担任と買い物に関わる取り組みについて情報交換し、課題の確認を行った。</li><li>・ 小遣い帳は宿題で取り組んだものと、同様の様式を用いた。</li></ul>
<p>◆生徒の活動の評価</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 洗剤の残量が少なくなった際、自分から職員に申し出ることができた。</li><li>・ 購入する商品名をメモし、それを手がかりに商品を選び購入することができた。</li><li>・ 残金やレシートを見ながら、小遣い帳の記入の仕方が分かってきた。</li><li>・ 合計金額が分かり、合計金額より多く支払いおつりを受け取ることができた。</li><li>・ 初めて購入する物は、値段や容量などを比較し、商品を自分で選択することは難しく、職員の助言が必要だった。</li><li>・ 複数の金種を組み合わせると合計金額ちょうどに支払う際は、小銭を数え間違えるなど確実ではなかった。</li><li>・ 店員とのやり取りでは、焦りから落ち着いて対処できないことがあった。</li></ul> <p>◆職員の指導内容の評価</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 同行者を担当職員に限定しなかったことによって、複数の視点で実態を把握し、課題を確認できた。</li><li>・ 主体性を引き出すため、活動の中に楽しみの要素を加えたり、本人からの発信を待ったりする取り組みは、有効だった。</li></ul>

## 【事例2】

対象舎生：G（高等部 1年） 泊数…4泊（6月～8月に一時的に中間帰省）
長期目標：寄宿舎生活に慣れ、自分でできることを増やす。
短期目標：時間を意識して行動することができる。
<p>◆指導内容（手立て）</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・登校時間に合わせて装具の着用ができるように、玄関への移動時間を決める。</li><li>・登校前に入浴時間を自分で決め、下校後、入浴への移動時間を職員と確認する。</li><li>・時計を確認する声掛けを行う。</li></ul> <p>◆主体性を引き出すために、棟内で工夫、確認したこと（できる環境作りや指導場面など）</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・登校に時間が掛かることを確認し自覚を促した。</li><li>・ある程度、時計の見方が理解できていることを確認した。</li><li>・事前に登校、入浴について、時間を意識して一人で行動することを本人に説明してから取り組んだ。</li><li>・入舎に対してのわだかまりがあったために、中間帰省を実施し、寄宿舎生活への意欲につながった。</li><li>・職員は時計に注意を向けるための声掛けのみとした。</li><li>・主体的に行動できたときには称賛した。</li><li>・生徒同士の声掛けをしないように確認した。</li><li>・行動記録や引継ぎを通して、行動の変化について共有した。</li></ul> <p>◆学校との連携</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・日々の行動と対応について共有する。</li><li>・スムーズな下校ができるように声掛けの対応について共有する。</li><li>・保護者に協力を依頼し、中間帰省を行うことで本人の気持ちを受け入れる。</li></ul>
<p>◆生徒の活動の評価</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・先回りの声掛けや細かい指示は、あえて逆らうような行動につながるため、時間に注意を向けるための声掛けのみとしたことによって、スムーズに移動できるようになってきている。</li><li>・登校時に時計を確認することが定着し、称賛されることがマイナスに働いて「自分ではできる」のアピールが見られていたが、周りの生徒とは違う特別感もあり積極的に行動ができている。</li><li>・学校との情報共有から中間帰省を取り入れたことによって、気持ちの安定につながり自分で時計を確認しスムーズに入浴に向かうことが多くなってきている。また、入浴状況により決めた時間に入浴できないこともあるため、事前に確認するよう声掛けすると、一人で確認・報告ができ意欲が見られている。</li><li>・食事などの時間にも、時計を意識する行動が見られるようになってきている。</li></ul> <p>◆職員の指導内容の評価</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・毎日同じ場面や状況で取り組めるように分かりやすい目標の設定は、主体的な行動につながるために適切な目標だった。</li><li>・実態把握から少ない声掛けでの取り組みは効果的だった。しかし、職員の関わり方で行動が安定しないこともあり、職員間の共通理解をさらに深めることが必要と感じた。</li><li>・学校と寄宿舎の連携と保護者の協力のもとに中間帰省の実施は有効的だった。</li></ul>

### 【事例3】

対象舎生：H（ 中学部 3年 ） 泊数… 2泊
長期目標：いろいろな経験を積み、生活習慣を身に付ける
短期目標：乾いた洗濯物を、所定の場所に片付けることができる。
<p>◆指導内容（手立て）</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・衣装ケースに衣服の種類を表示し、片付ける場所を明確にする。</li><li>・収納する物に合わせて仕切りを付けたり、ケースを用意したりして片付けやすいようにする。</li><li>・畳んで片付けることが難しい衣服は、ハンガーにかけてロッカーに収納することを本人と確認する。</li></ul> <p>◆主体性を引き出すために、棟内で工夫、確認したこと（できる環境作りや指導場面など）</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・他室の収納方法を見て、どの方法ならできるか自分で考えて選ぶ場面を作った。</li><li>・ズボン用のピンチ付きハンガーと大きいハンガーの数を増やしてもらうように、家庭に協力を依頼した。</li></ul> <p>◆学校との連携</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・教室内の環境（どのような場所で畳んでいるのか）を確認し、同じ畳み方にした。</li><li>・舎で畳む衣服は運動着と靴下や下着類とし、他の衣服はハンガーにかけたままでロッカー収納することを伝えた。</li></ul>
<p>◆生徒の活動の評価</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・自分で考えて決めた収納方法だったため、自分から取り組むことができた。</li><li>・手指機能から畳むことは難しく定着に至らなかったが、ハンガーに干した衣服を、週の始めにロッカーに片付けることができるようになった。</li><li>・使いやすいハンガーを使用したことによって干し方が上手になり、衣服の形が整った状態で収納されるようになった。</li></ul> <p>◆職員の指導内容の評価</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・棟内で指導方法を共有することはできたが、週2回の宿泊だったため、舎室担当が中心になり指導することが多かった。</li><li>・実態把握、支援方法の検討を棟の職員全員で行ったことから、新たな実態に気付くことができ、実態に即した手立てを見出すことができた。</li><li>・職員が収納方法を決めず、いくつかの方法から本人が選択する場面を作ったことは、本人の意欲を引き出すために有効であった。</li><li>・畳むことにこだわらず、本人の実態に合った収納方法を考えていく必要があることに気付いた。</li></ul>

#### イ 成果と課題

##### <成果>

##### ・自立活動の領域を用いた実態分析

年度初めに行う実態把握は、24項目に対して112の内容で4段階評価となっており、舎室担当が行っている。今回新たな視点で実態を探るべく自立活動の領域に個別の生活指導計画の短期目標をあてはめてみた。そして棟の職員全員で目標に関連する実態を付箋に書きだしたことにより、生徒の得意なことや困っていることなどを見出すことができ、より多面的に実態を捉えることができた。加えて実態に寄り添った目標に見直すこともできた。また、寄宿舍で行っている生活指導が6領域を網羅していることも確認することができ、その中でも生活の場

である寄宿舎は、「心理的な安定」の領域を大切にしたい支援が重要であり、情緒の安定が主体的な行動につながることに気付くこともできた。

・主体的な学び

自主的な行動を引き出すために興味・関心を喚起できるような手立ての工夫をし、自分の力だけでできる環境作りをしてきた。また、自己選択・自己決定する場面を職員が意識して作ってきたことにより、生徒の「やってみたい」という意欲を引き出すことができ、積極的な行動につながった。

・学校との連携

学校と寄宿舎それぞれにおける課題や取り組みたい内容を担当者間で確認して指導・支援を行った。情報交換に留まらず、今年度は支援方法の共有まで深めることができた。

<課題>

- ・「主体的・対話的で深い学び」の視点に着目し指導・支援を行ったが、「できるようにさせる」または職員自身の生活経験から「こうあるべき」という意識になる傾向があることに気付いた。的確な実態把握をし、何が課題となっているのかを見極めた上での指導・支援が必要である。
- ・寄宿舎の利用形態は2～4泊と違いがあるが、個々の指導場面を想定し、スモールステップでの目標設定になっていない場合があることに気付くことができた。一人一人の生活経験を踏まえ、「できた」という達成感を積めるような目標にする必要がある。

(4) まとめ

学校との連携をさらに深め、同じ観点で主体性を引き出すため、今年度は新たに学習指導要領に掲げられている「主体的・対話的で深い学び」の観点にも着目して実践を積んできた。また、自立活動の領域を活用して多面的に実態を捉え、支援方法の改善を図りながら指導・支援してきたことにより、意欲を引き出し主体的な行動につながったと思われる。

今後も主体性の伸長を図り、将来につながる生活力を身に付けられるよう、支援方法を模索していきたい。

## Ⅷ 研究のまとめ

合わせた指導において、各教科等の視点を踏まえた目標を設定し指導・支援に取り組むことを通して、児童生徒一人一人がより主体的に活動できる授業づくり・生活づくりにつなげることができた。小学部では、自分たちの教室などをきれいにする理由などに気付くことができたり、教師や友達の手本をもとに人の関わり方を学び、自分なりに考えてより良い関わりをもとめたりする姿が見られた。中学部や高等部の作業学習では、良い紙を作るためにどうすればよいかを考えて作業する、道具の使い方などを学んで理解を深め、作業の中で自分がどう動けばよいかを自ら考える、など、自分の得た知識や技能を生かしてより主体的に取り組もうとする姿が見られた。寄宿舎の指導においては、合わせた指導の視点から学校との連携をさらに深めた上で、自立活動の領域を活用して多面的に実態を捉え、支援方法の改善を図りながら指導・支援してきたことから、困った時に自分から職員に申し出る、自分で生活をよりよくする方法を考えたり選んだりするなどの主体的な行動につながった。今後も、実践と検討を積み重ねながら、児童生徒が将来の生活に生きる力を身に付けられるよう、指導を充実させていきたい。